

2. 講道館柔道の文化的特性に関する研究 —伝統とその継承—

筑波大学 藤堂 良明
ミキハウス 中島英里子
講道館 村田 直樹

2. A characteristic of Kodokan Judo culture —tradition and its succession—

Yoshiaki Todo (University of Tsukuba)
Eriko Nakazima (Miki-house)
Naoki Murata (Kodokan Judo Institute)

Abstract

We make the characteristic of Kodokan-judo culture on the point of technique and the spirit, at first. According to this investigation, we survey the judo player whether seeking for sports or Budo and how succeed the Kodokan-judo culture of their own training at each other.

Results are as follows

- ① The ratio of judo player of seeking for sports to others as Budo races in Japan is 6 to 4. Now Almost all the young judo player know Jigoro Kano as the founder of Kodokan-judo.
- ② Concerning the spirit, The judo player for seeking as sports lays stress on winning, and the judo player for Budo lays stress on discipline. Both the judo player understand “To make the most useful of mind and body, and to make the mutual welfare”, But Few player understand what the real meaning of Jigoro kano said.
- ③ Kano advocated that judo player should practice Randori and Kata simultaneously. In spite of his thoughts, Recently Few judo player practice kata everyday, and occasionally practice Kata for progressing dan for example from 1st-dan to 2nd-dan. At competition, Judo player hope to win his opponent by Ippon and to try out the technique. But judo player seeking for Budo answer to win his opponent by point, they seem to seek not to win his oppnent by Ippon but to seek disciplin.

1) はじめに

講道館柔道は、明治15年に嘉納治五郎師範（以後、嘉納で統一）が柔術を集大成して創始したものである。日本で生まれた柔道はその後世界に広まり、オリンピック競技の種目にまでなったことは誇りでもある。しかし実際には、柔道がその精神面よりも勝ち負けの評価で終わり、本来の講道館柔道の文化的特性が失われつつあるのも事実である。これまでも嘉納の柔道観の継承については、永木らの「戦後における嘉納師範の柔道観の継承に関する研究」等があるが、柔道新聞の分析に基づくものがベースとなっていた。

そこで本研究は、まず第1章において講道館柔道の文化的特性を、嘉納が明治22年に講演した「柔道一斑并ニ其教育上ノ価値」や、明治31から35年まで『國土』で連載された「講道館柔道講義」及び昭和6年刊行の『柔道教本』等にあたり、その技術と精神的特徴について明らかにする。ついで第2章においては、第1章で明らかにされた講道館柔道の文化的特性を踏まえ、現在柔道を修行している者が如何に嘉納が唱えた柔道の特性を理解して修行しているのかを、武道として行っている群と競技スポーツとして行っている群とに分けてアンケート調査を行ない、講道館柔道の伝統とその継承について考察したのである。

2) 講道館柔道の文化的特性について

講道館を創始した嘉納は、明治22年に大日本教育会の依頼により、文部大臣やイタリー公使らの出席を仰ぎ、「柔道一斑并ニ其教育上ノ価値」と題して講演を行った。講道館創立の経緯や柔道の目的及び教育的価値に言及したものであり、柔道の一般を知れる資料である。この中で、嘉納は柔術の元来の目的は勝負の法を練習することであり、間接的目的として体育と練心があつたが、講道館柔道では「体育勝負修心ノ三ツノ目的ヲ有ッテオリマシテ、之ヲ修行致シマスレバ体育モ出来勝負ノ方法ノ練習モ出来、一種ノ智育徳育モ出来ル都合ニ成ッテオリマス。」¹⁾と記して、柔道の目的として体育と勝負と精神修養を同等にあげ智徳体の備わった全人教育を標榜したのである。体育については柔道体育法とも称して、「筋肉ヲ適當ニ発達サセルコト、體身ヲ壯健ニスルコト、力ヲ強ウスルコト、身體四肢ノ働キヲ自在ニスルコト等デ御座イマス。」²⁾とされ、柔道により筋肉を強くし健康になりそして身体を自在に操れるようにする、と説かれた。勝負とは、「人ヲ殺ソウト思ヘバ殺スコトガ出来、傷メヨウト思ヘバ傷メルコトガ出来、又向フヨリ自分ニソノ様ナコトヲ仕掛ケテ参ツタトキ此方デハ能ク之ヲ防グコトノ出来ル術ノ練習ヲ申シマス。」³⁾と述べ、柔道試合における勝負よりも、人を制し制せられない武術の稽古を指していた。また修心とは精神修養のことであり、嘉納は「徳性ヲ涵養スルコト」⁴⁾として柔道修行により愛国の情や気風高尚、勇壯活発、礼儀作法等が養われるとし、「智力ヲ練ルコト」⁵⁾では柔道の修行と観察、記憶、想像等との関係を挙げ、「勝負ノ理論ヲ世ノ百般ノコトニ応用シテ、物ニ接シ事ニ当ツテ自カラ處スル所ノ方法ニ熟練サセルコト」⁶⁾では、自他の関係を見るべしや如何なる場面でも全力を尽くす等の心構えを、社会生活に応用するようにと説明している。このように嘉納は、講道館柔道の目的として「体育、勝負、修心」を唱え、それに則り柔道技術論及び思想面も充実していったのである。

まず技術面について見ていこう。嘉納は体育法の立場から、危険が無く全身運動である乱捕の開発を進め、勝負法の立場から武術の要素を含んだ「形」を創作していった。“乱捕”については、「あらかじめ禁じられてある幾らかの仕方を除きさえすれば、どんな仕方でも人々随意的の仕方では修行者が互いに勝負を試むることである。突いたり蹴ったりことさらに危険なことをすることは禁じられてあるが、本来乱捕では投と固とが目的でおのおの自分の適当と思う方法を施してそ

の目的を達しさえすればよいのである。⁷⁾」と記し、危険な技は禁じられているが、習った投技や固技を双方が自由に掛け合う練習とした。これによって、体の運用や進退動作等の実地の仕方が身に付くようにした。特に投技に関しては「崩しと作りと掛け」が大切であるとして、「技の掛かり易いように相手の身体を崩し、自分の身体を構えることを作りといい、又作られた姿勢に対し、技を施すことを掛けという。乱取りを修行する際、殊に投技においては、初めには作りの練習に重きを置き、後には掛けの練習に力を注ぐことを得策とする。その訳は、作りが十分に出来ていれば、掛けは弱くても技は掛るが、作りが不十分であると、掛けが利いても、対手が強ければ掛からないし、対手が弱ければ、怪我をさせる恐れがあるからである。⁸⁾」と記し、まず相手の身体を崩し自分は技を掛けやすい様にして、その後には技を掛けることが大切であるとされた。乱取では力まかせでなく、「崩しと作りと掛け」を使って投げることの大切さが説かれたのである。

一方「形」については、嘉納は明治20年代に乱取りの形として「投の形」「固の形」を作り、武術の形として「古式の形」や「極の形」等を拵えていった。「形」については、「勝負を目的とする形では乱捕の目的になっているところの投、固の他に当という事もある。当とは相手の急所を打ったり突いたり蹴ったりすることであるから、乱捕でそのようなことをしてははずいぶん危険である。それゆえ形でそれらのことを教えることにして相手が突いてきても蹴ってきても、あらかじめ順序方法が分かっているから危険無くこれに応じていくことが出来る。⁹⁾」と記され、勝負を目的とする「形」では乱捕では危険で学べない当身技を習得できるとされた。また「投、固の業でも乱捕だけで修行するときはある仕方には大層よく熟してもある仕方は一向未熟というようなこともあり、またいろいろの業の理論を短日月の間に一通り悟り得る事はむつかしい。されど形の修行をすると割合に早く全体に通じて分る。¹⁰⁾」とも記され、「投の形」や「固の形」によって乱取時に使用しない投業や固業も学べるとされた。そしてこの「形」と乱取りとの関係については、「形だけがどれほど出来ても乱捕の修行を十分しておかぬと実際に当って思うようにいくものでない。形と乱捕との関係は陸上で講ずる航海術と海上の実地経験との関係のようなものであろう。形と乱捕とは偏廢することの出来ぬものである。¹¹⁾」とされ、「形」で理合いを学び乱取は実地練習であり、「形」と乱取りは並行して学ぶようにと説かれた。

ところで、こうした乱捕や「形」に通じている大切な原理としての柔道の「柔」については、嘉納は次の様に述べている。「柔術、柔道の柔という時は、柔能制剛の柔から取ったのであるという説があるけれど、実際はそうではなく「ヤワラ」を漢字で『ヤワラカイ』という言葉に漢字を当てただけのことであるように思われる。しかしそんなことはどうあったにしても、ともかくも柔道の柔の意味は柔能制剛の柔の字の意味に当たっている。¹²⁾」として、柔はヤワラカイという言葉に柔をあてたと思われているが、やはり柔よく剛を制する意味があったと説いている。そして実際の場面では、「柔にして勝ちを制することは先方から力を入れて掛けてくるときは、その力に逆わず出すだけの力を出させてみて、先方が自分の力で自分からその身体の位置を危うするを待って、こちらからはその場合に適当な業を掛けるというようなことをいうのである。¹³⁾」と記し、相手の力に逆らず従いその力を利用して勝つ、という意味で説かれたのである。柔道の「柔」とは、力づくでなくこの柔の理に基づき勝ちを制するという点にあったといえる。

“試合”に関しては、嘉納は明治18年頃から月次試合や紅白試合を設けており、大正期に入ると対抗試合も盛んに行われ、昭和5年からは全日本柔道選士権大会も開催された。試合のあり方については、「試合の時、正しい姿勢を維持し、礼儀を守り、法則に順ってづんづん業を掛けるようであれば自然平素の修行振りが伺ひ知らるる訳で、さういふ態度や業振を尊ぶのである。～中

略～、試合の当時勝っても無理をしたり卑劣な仕方です勝ったなら、他日大いに進むものと思はれないから、価値は少ないのである。¹⁴⁾」と記し、正しい姿勢で礼儀を守り日々の修行で身につけた作りや掛けの法則に則り業をどんどん掛けることが大切であるとされた。

一方、講道館柔道の精神面についても、基本になった考え方は「体育、勝負、修心」であった。特に修心法に盛り込まれた、「勝ッテソノ勝チニ驕ルコト無ク、負ケテソノ負ケニ屈スルコト無ク、～中略～但タダ一筋ノ道ヲ踏ミ行ケ¹⁵⁾」といった、どんな場合にも全力を尽くすという考え方は、その後の柔道の目標である「精力善用」に繋がる萌芽が見られる。また、自他の関係を見るは「自他共栄」の精神の原点ともいえる考え方であった。明治後半から大正期にかけては、嘉納は柔道技術の原理の追求から新たな柔道思想への構築へと研究を進める。当初の技術の原理は、柔術以来の相手の力に順応しその力を利用して勝つという「柔の理」でもって説いていたが、やがて柔道の攻撃防御においては、自分から技を掛けていく場合や絞められた場合には、これまでの「柔の理」だけでは説明できないとして、あらゆる攻撃防御の場合にその目的を達成するために精神と身体の力を最も有効に働かすことであるとした。さらに嘉納は、衣・食・住・社交などの人間社会の全てに具現する「道」に応用すべきとして、柔道を「心身の力を最も有効に使用する道」の名称としたのである。そして嘉納は、「実社会に於ける人間の行いは、総べて善を目的としなければならぬのであるから、善を目的として心身の力を最も有効に使用すべきである。言葉を変えて言えば、精力最善活用ということになる。更にこれを略すると精力善用となる。¹⁶⁾」として、心身の力を善を目的に最も有効に使用するという事で精力最善活用とし、これを略して「精力善用」の用語を編み出したのである。

大正期に入ると、資本家と労働者との衝突や国際関係も融和提携しなければ独立を維持することが困難な時局となり、嘉納は大正11年には講道館文化会を設立し、その席上で「精力善用」に続けて「自他共栄」を発表した。この「自他共栄」については、「人は常に自分の栄えと他人の栄えと両立するように、自分の事のみを考えず、人の為をも考え、他人の為に尽くしながら自分の為をも図ることを忘れぬという所に、融和も平和も進歩も生じてくるのである。¹⁷⁾」と記し、人間は自分も他人も共に栄えていくことが必要であり、互いに助け譲り合うことにより融和や平和も生じるとされた。こうしてみると、自他共栄とは柔道練習時のみでなく、融和の世界を目指すものであり、平和な社会や国家を願う現代でも通じる思想といえる。「精力善用、自他共栄」は、柔道修行により到達する理想の境地を言い表した言葉であり、柔道の指導理念といえるものであった。

なお「礼法」については、修心法の「徳性ヲ涵養スルコト」の項目で、柔道修行中に必要な精神として述べられ、以来、乱取りや「形」や試合では必須の作法として唱えられた。特に礼の意義としては、「形も乱取もその事柄が争いであるから、始める時にも、終って後分かれる時にも敬意を表し、争いは技術を練る目的ですが、相互の間には尊敬し合って居るという心持を示すのである。¹⁸⁾」と記され、柔道は争い事であるからこそ相手に対する敬意を表わさねばならないとされた。更に礼は、道場への出入りの際は修行場に対して心身を統一する意味から必要であり、そこに居合わせた人に対しても行なわなければならないとされたのである。

3) アンケートの方法と内容

嘉納が創始した講道館柔道の文化的特性を、現在柔道を修行している高校生や大学生に如何に受け継がれているかをアンケート調査し、104名の回答を得た。最初にく質問1)で、現在柔道を競技スポーツとして行なっているか、武道として行なっているかを調査し、それに基づき、競技

スポーツ群と武道群の二群に分けて分類し集計した。なおアンケートは、下記の柔道関係者に配布し、結果は平成16年1月に集計した。

- ・ T大学体育会柔道部
- ・ T大学柔道同好会
- ・ K大学体育会柔道部
- ・ 関東Jr強化選手（高校生）

アンケート内容は以下の通りである。

アンケートの内容

年 齢 歳
柔道暦 年 ケ月

<質問1>

1) あなたは柔道を競技スポーツとして行なっていますか、武道として行なっていますか（どちらか一方に○を）

1. 競技スポーツ 2. 武道（道を学ぶ教育）

2) 講道館柔道を創始した人の名前を書いてください

()

<質問2>

1) 講道館柔道の精神はどれですか（どれか1つに○を）

1. 気力充実 2. 活気活体 3. 精力善用 4. 質実剛健 5. 忠君愛国

2) 1) で○をつけた意味について書いて下さい

()

<質問3>

1) あなたは「自他共栄」という言葉を聞いたことがありますか（どちらか一方に○を）

1. ある 2. ない

2) 1) で“ある”と答えた方のみ、それはどの意味だと思えますか（どれか一つに○を）

1. 正確な意味はわからない。
2. 自分が他人よりも栄えることを考える精神。
3. 自分よりも他人のことを考える精神。
4. 自分も栄え、他人も栄えるという精神。
5. 自分も栄え他人も栄えて、融和や平和を望む精神。
6. その他 ()

<質問4>

1) あなたは「体育、勝負、精神修養」という言葉を聞いたことがありますか（どちらか一方に○を）

3. 相手に一本で勝つこと。
4. 特に何も考えていない。
5. 崩しの感覚をつかむ。
6. その他 ()

〈質問9〉

あなたは何のために「礼」をしたいと思いますか（複数可）

1. 相手を敬うため。
2. 自分の気持ちを落ち着かせるため。
3. 相手に対しての感謝（打込みや乱取りなどの始めと終わり）。
4. ただなんとなく。
5. 審判規定で定められているから。
6. 自分が怪我をしないように気合を入れる。
7. その他 ()

〈質問10〉

以下の1～9までの項目について、あなたが最もよくあてはまる番号に○をつけて下さい。

	非 常 に あ て は ま る	や や あ て は ま る	あ ま り あ て は ま ら な い	全 く あ て は ま ら な い
1. 柔道は護身術として役立つ	1	2	3	4
2. 柔道は身体の強さや健康に役立つ	1	2	3	4
3. 柔道は身体を敏活にする	1	2	3	4
4. 柔道は克己や忍耐、礼儀正しさ等の精神修養に役立つ	1	2	3	4
5. 柔道は観察や記憶力、工夫等の智力を養うことに役立つ	1	2	3	4
6. 柔道の稽古は打ち込みから乱取りへといった順序がある	1	2	3	4
7. 受け身は身を守る方法である	1	2	3	4
8. 試合は結果よりプロセスが大切である	1	2	3	4
9. 技を掛ける時、崩し体さばきを意識している	1	2	3	4

4) アンケートの結果と考察

平均年齢は20.4歳であり、柔道歴は8.3年であった。

〈質問1〉柔道を競技スポーツ、あるいは武道として行っているか

104人中、柔道を競技スポーツとして行っていると答えた人が63人(61%)、武道として行っていると答えた人は41人(39%)であり、20歳前後の若い柔道修行者では「武道」として学んでいる人は少ないといえるだろう(図1参照)。また両群に講道館柔道創始者の名前を質問したところ、「嘉納治五郎」と答えた人は競技スポーツ群では63人中62人が、武道群では全員が正答し、良く知っているとの結果が出た(表1)。

〈質問2〉「精力善用」について

講道館柔道の精神として「精力善用」と回答したのは、競技スポーツでは84%、武道では90%と若干武道群が上回った(表2参照)。「柔道で力を有効に使い、柔道で養った体力や精神力を世の中の為に使う」と正しく理解していたのは、競技スポーツでは14%、武道では22%であり差が出た(表3参照)。このような結果がでたのは、武道として柔道を行っている人は、柔道＝精神鍛錬の場として理解し、道場に掲げられたこの文字を見たり指導者の言葉に関心を持っており、常にこの精神を意識していると考えられる。次に多かったのは両群とも「精神を鍛える」というもので、精力を精神として解釈しているものと考えられる。

〈質問3〉「自他共栄」について

競技スポーツで89%、武道で88%で共に9割弱の人が「聞いたことがある」と答え、両群共によく浸透していると思われる(図2参照)。しかし、「自分も栄え他人も栄えて、平和や融合を望む精神」と答えた数値は、競技スポーツでは16%、武道では28%であった(表4参照)。両群共に、自分も栄え他人も栄えるという精神だと解釈している人の比率が最も高かった。それは、柔道の稽古は打ち込みや乱取、「形」において相手と組み合って行う形態が多く、自分と相手が共に向上するというように解釈されるのも当然といえるだろう。ただ嘉納が唱えた自他共栄は、柔道の場での自分と他人との向上にとどまらず、世の中の平和や融合までも望む精神を含んでいたもので、この点の認識に欠けていることが判明した。

〈質問4〉講道館柔道の目的について

「体育、勝負、精神修養」については、競技スポーツ群49%、武道では39%が「聞いたことがある」という結果であった(図3参照)。この項目の正しい解釈は、3つの目的が互に関連しあっており、その中の一つだけでは片寄りがみられ、あくまで3つが同等に存在することである。しかし、アンケートの結果は、競技スポーツは「勝負」に、武道では「精神修養」に重点を置いて解釈していた。なお両群共に最も多かった回答は、「正確な意味はわからない」という項目であった(表5参照)。

〈質問5〉柔よく剛を制すについて

「柔よく剛を制す」という言葉については、両群とも95%が「聞いたことがある」という結果であった(図4参照)。またその意味についても、「小さい人が相手の力を利用して自分よりも大きい相手を投げる」という正しい理解を、競技スポーツでは90%、武道では95%で両者共に理解していると言える(表6参照)。講道館柔道の柔の意味が浸透しているといえるだろう。

〈質問6〉「形」について

「形」の意義については、競技スポーツ63%、武道67%が「技の原理を学ぶことが出来る」と答えており、嘉納が唱えた「形」について解釈できているといえる。実際「形」の稽古をすると、技を掛ける際の相手の崩し方や体さばきを学ぶことができる良い点はあるが、「形」を取り入れて

の稽古は皆無に等しい。その理由として、「形」は乱取と違い相手との実際の攻防が無いので興味に掛ける、といった理由からではないだろうか。その点で、「昇段審査の時に必要なのでその時のために習得する」といった回答が、両者共に20%程度あったことも不思議ではないだろう。又、「形」を「護身術として学ぶ」という項目が、競技スポーツ群（11%）は武道群（2%）より高かった。その理由は、競技群は乱取や試合は競技として、「形」は護身術として捉えているからだと思われる。（表7参照）

〈質問7〉乱取について

競技スポーツでは51%、武道では54%と共に最も多かったのは、「日頃の打ち込みで練習している技を試すこと」の項目であった。更に「崩しの感覚をつかむ」は競技スポーツ13%、武道は10%であり、両回答を加えると、共に64%の人が日頃稽古している技を試すにつながっているといえる。競技スポーツが「相手に勝つ」と回答した人が13%であったことは少ないように感じられるが、柔道の基本には技の習得とそれを試すことに意義があると捉えているからだろう（表8参照）。

〈質問8〉試合について

嘉納が唱えた、姿勢を正し礼儀を守り「日頃練習している技を試すこと」と回答した人は、競技スポーツ30%、武道22%であまり多くはなかった。むしろ「相手に一本で勝つこと」と回答した者は両群とも最も多く、競技スポーツ56%、武道は46%であり、競技スポーツ群が10%多いという結果となった。ただし注目すべきは、「相手にポイントで勝つこと」と回答した人は、武道と競技スポーツとの間には大きな差があり、武道が20%強をも占めていた（表9参照）。これは、競技スポーツ者は常に一本で勝つことを要求され、常日頃その意識で取り組んでいるが、一方、武道として修行している人は勝負よりも精神修養を目的としているため、自分の持っている力を精一杯発揮し、その結果のポイント勝ちも認めていると言えるだろう。

〈質問9〉礼法について

競技スポーツ、武道群共に多かったのは、「相手に対する感謝」「相手を敬う」といった順番であり、共に8割を越えていた。この結果からも講道館柔道の礼の意義はよく理解されているといえる。ただ「自分の気持ちを落ち着かせる」といった回答が共に10%程度あったことは、試合等の緊張場面では相手を敬う気持ち以上に、自己コントロールが求められているものと考えられる。なお、「ただなんとなく」「審判法で定められているから」と答えた割合が武道1に対して、競技スポーツは8であった（表10参照）。これは競技スポーツ者の中には、礼の精神云々よりも競技を重視している証左といえるだろう。

〈質問10〉

「柔道は身体の強さや健康に役立つ」「柔道は身体を敏活にする」といった体育面では、武道群が競技スポーツ群より共に高い割合を示した（図6、7参照）。競技スポーツでは、試合を目的に身体を酷使する傾向にあり、武道群の方が講道館柔道の体育法の観点に添った考え方で行われていると言える。講道館柔道の精神修養としては、克己や礼儀正しさ等の「徳性の涵養」と、観察や記憶力、創意工夫等の「智力の養成」とが挙げられていたが、武道群は「克己や勇気、礼儀正しさの体得」で10%ほど高い値を示し、一方「観察や記憶力、工夫する力の体得」は競技スポーツ群が高い値を示した（図8、9参照）。これは、競技スポーツ群では技の習得や作戦に重きを置いていることによると考えられ、「技をかけるとき、崩しや体さばきを意識している」と回答したのも競技スポーツの方が多かった。受身については、両群ともに「一つの身を守る方法」と回答し、受身の意義を十分認識しているといえる（図11参照）。「柔道は護身術として役立つか」に関

しては、武道群が競技スポーツ群をはるかに上回った(図5参照)。質問6の「形」の所では、競技スポーツの方が「形を護身術」として捉えている数値が高かったが、これは武道群は柔道そのものを護身術として考え、競技スポーツ群は試合は競技として「形」は護身術として捉えているものと思われる。

5) まとめ

嘉納が創始した講道館柔道の文化的特性とは、柔道を通して身体精神を鍛え、国家社会に貢献する人物を作るという教育的なものであった。しかし現代の20歳前後の修行者は、柔道を6割の人達が競技スポーツとして行っており、4割の人が武道として行っているに過ぎないという結果が出た。まず精神面については、講道館柔道の目的として「体育、勝負、精神修養」の3つをバランスよく行うことが唱えられたが、競技スポーツ群は「勝負」に、武道群は「精神修養」に重点が置かれ、柔道の目的はあまり継承されていないといえる。また精神修養の内容としては、競技群は記憶や創意工夫などの智力の養成を重んじ、武道群は礼儀や克己等の徳性の涵養を重視しているという結果がでた。柔道の指導理念としての「精力善用、自他共栄」の言葉は、両者共に継承されているが柔道の場での応用にとどまり、柔道で養った精力の社会への応用や国家社会の融和や平和を目的とした考え方は乏しいという結果が出た。今後、指導者は「精力善用、自他共栄」の社会方面での意義について教えていく必要があるだろう。

一方技術に関しては、嘉納は「体育、勝負、精神修養」の観点から「形」と乱取を偏廃せずに行うように説いたが、今日の柔道修行者は、乱取においては打ち込みでの崩しや作り掛けを意識して取り組んでいるが、「形」の方は昇段に際して行くと答えた者も見られ、現実にはあまり行われていないといえる。また競技群は、乱取や試合は競技として考え「形」は護身術と捉えているのに対し、武道群は柔道そのものを護身術と捉えているという結果が出た。ともあれ、「形」には技の原理を学ぶと共に、護身術としての価値もあるから、機を見つけて行なう必要があるだろう。試合に関しては、「相手に一本で勝つ」が最も多く、次いで「日頃練習している技を試すこと」と続いたが、「相手にポイントで勝つ」という回答は武道群が競技群よりも多かった。武道群は精神修養を優先し、試合ではポイントでも良いという考え方から来ているといえる。

ともあれ柔道の伝統を守るためには、指導者が柔道を単に試合に勝つための技術向上のみに終始するのではなく、他のスポーツには無い柔道の特性や精神を修行者に伝授することが必要である。また修行者は、柔道により心身を鍛錬し社会に貢献することを認識し、実践することが必要であると考えられる。

引用文献

- 1) 嘉納治五郎(1889):「柔道一班并ニ其教育上ノ価値」、渡辺一郎編(1971)『史料明治武道史』、新人物往来社 86頁
- 2) 同上 86頁
- 3) 同上 89頁
- 4) 同上 93頁
- 5) 同上 93頁
- 6) 同上 95頁
- 7) 嘉納治五郎(1898):講道館柔道講義、國士第1巻第3号『嘉納治五郎大系 第3巻』(1987)

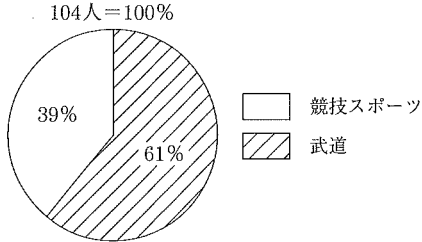
13頁

- 8) 嘉納治五郎 (1931) : 『柔道教本』 堀書店 19頁
- 9) 前掲 7) 14頁
- 10) 同上 14頁
- 11) 同上 14頁
- 12) 同上 14頁
- 13) 同上 14頁
- 14) 嘉納治五郎 (1918) : 「対抗試合の真意義」 柔道第4巻第3号 長谷川純三編『嘉納治五郎の教育
と思想』 明治書院 210頁
- 15) 前掲 1) 95頁
- 16) 前掲 8) 26頁
- 17) 同上 116頁
- 18) 同上 12頁

資料 アンケート結果の図表

〈質問1〉

1) 柔道を競技スポーツとして行なっていますか、
武道として行なっていますか (図1)



2. 嘉納治五郎と答えた人 (表1)

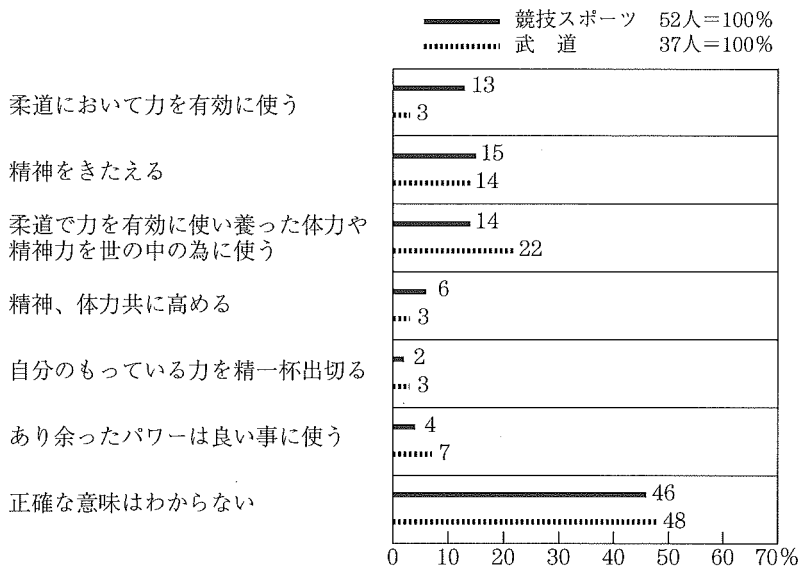
競技スポーツ	63人中	62人
武道	41人中	41人

〈質問2〉

1) 講道館柔道の精神は何ですか (表2)

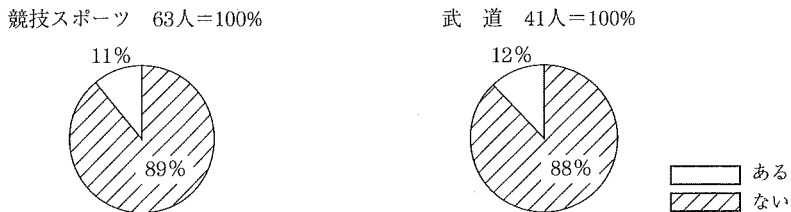
	競技スポーツ63人中		武道 41人中	
	人	%	人	%
精力善用	52	84	37	90
気力充実	4	6	2	5
質実剛健	3	5	2	5
活気活体	3	5	0	0

2) 「精力善用」の意味は何ですか (表3)

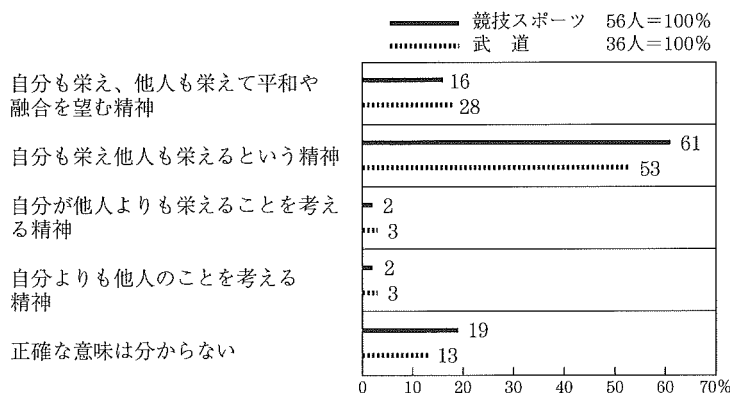


〈質問3〉

1) あなたは「自他共栄」という言葉を聞いたことがありますか (図2)

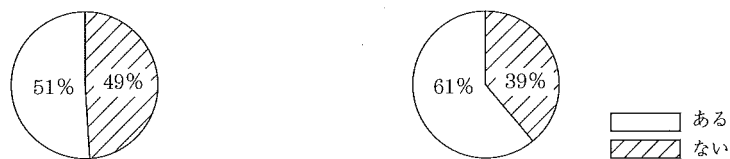


2) 1) で“ある”と答えた中で、それはどのような意味だと思えますか (表4)

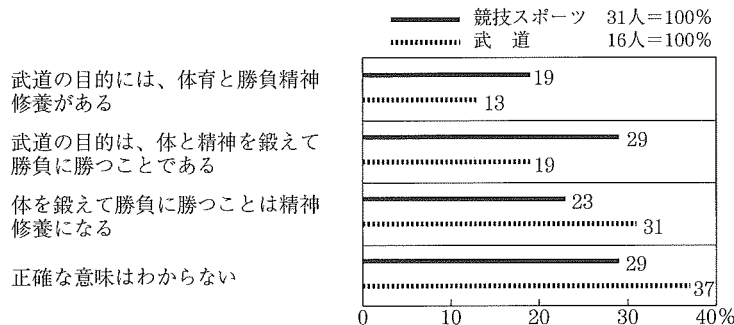


〈質問4〉

1) あなたは「体育、勝負、精神修養」という言葉を聞いたことがありますか (図3)。



2) 1) で“ある”と答えた中で、それはどのような意味だと思えますか (表5)

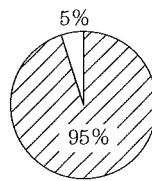
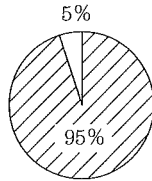


〈質問5〉

1) あなたは「柔よく剛を制す」という言葉を聞いたことがありますか (図4)

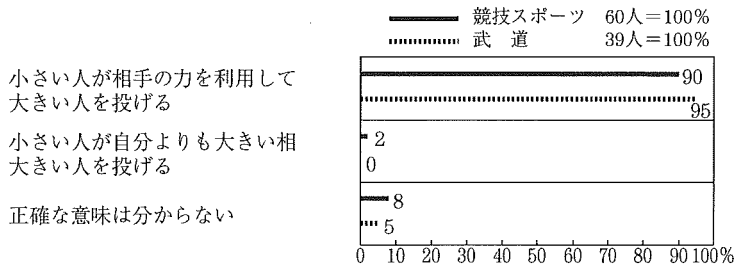
競技スポーツ 63人=100%

武 道 41人=100%



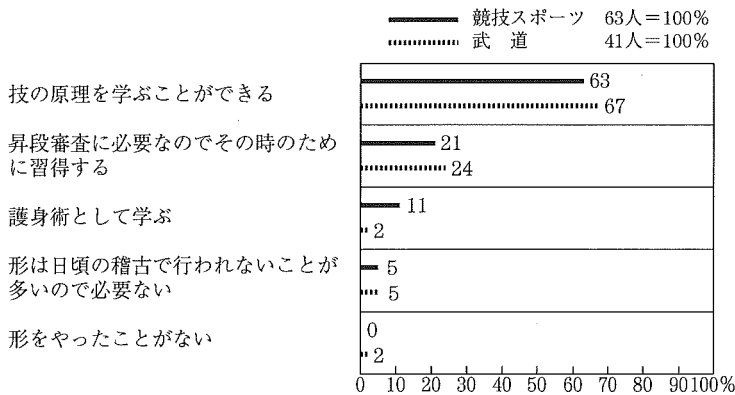
□ ある
 ▨ ない

2) 1) で “ある” と答えた中で、それはどのような意味だと思えますか (表6)



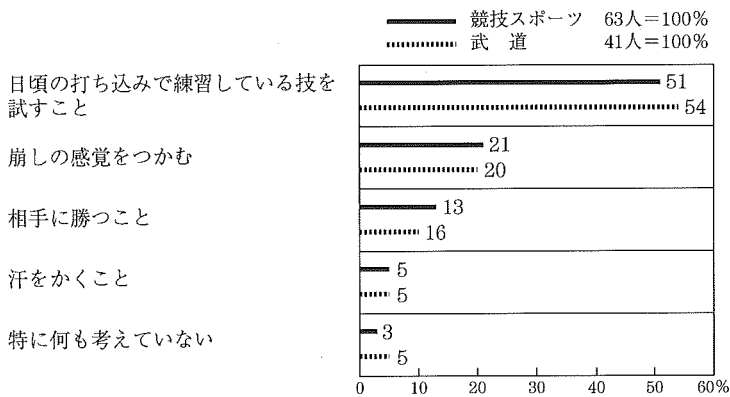
〈質問6〉

あなたは「形」についてどう思いますか (表7)



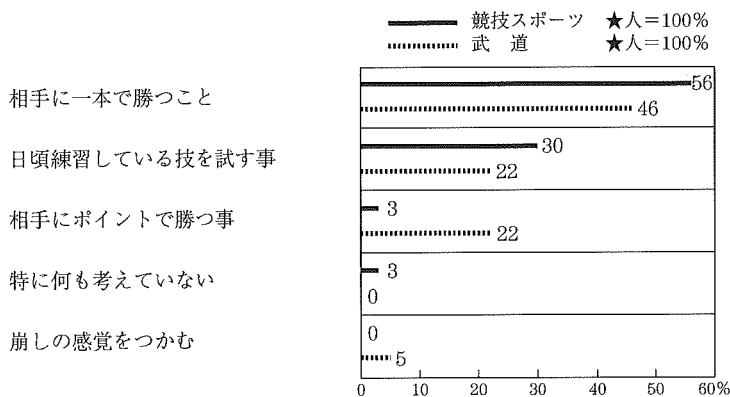
〈質問7〉

あなたは乱取をするにあたって心がけていることは何ですか (表8)



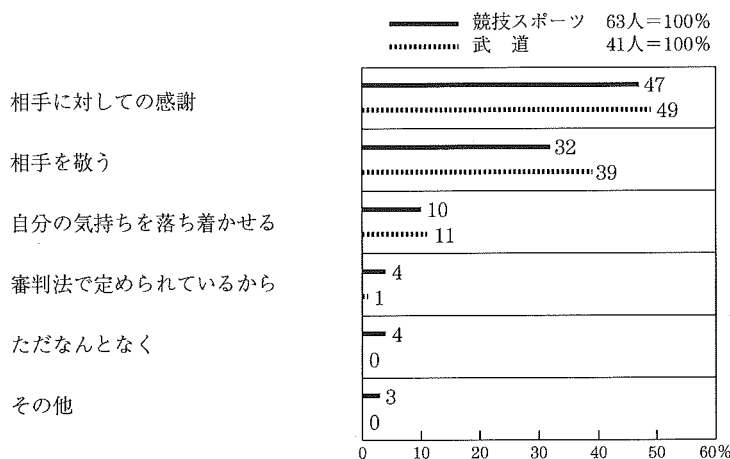
〈質問8〉

あなたは試合をするにあたって心がけていることは何ですか (表9)



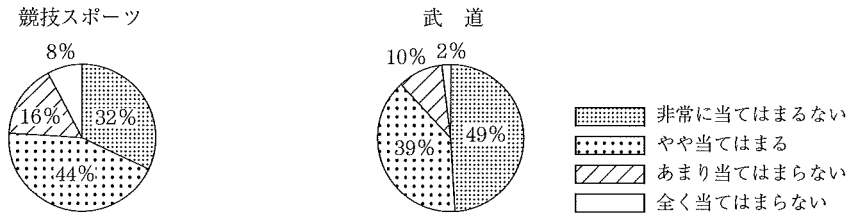
〈質問9〉

あなたは何のために礼をすると思いますか (表10)

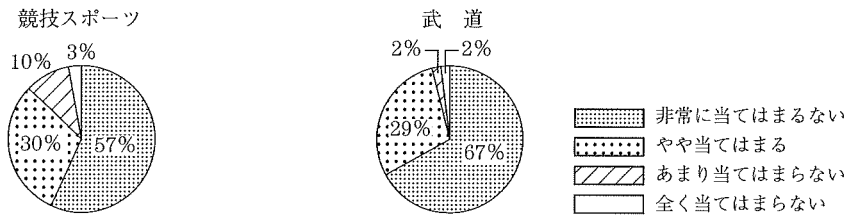


〈質問10〉

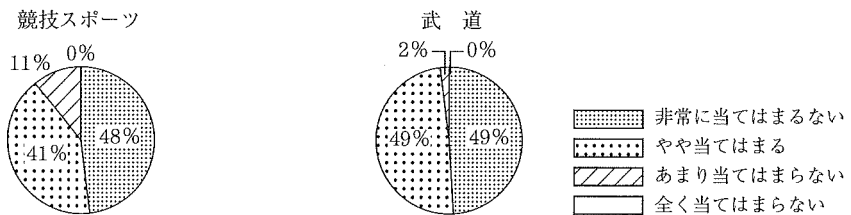
1. 柔道は護身術として役立つ (図5)



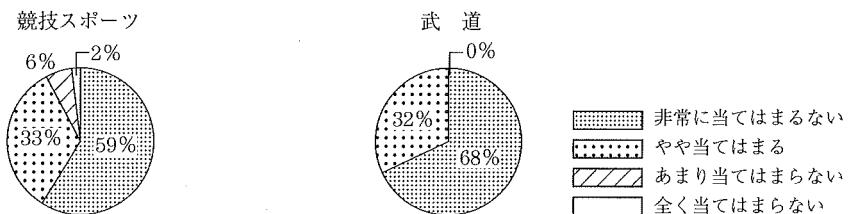
2. 柔道は身体の強さや健康に役立つ (図6)



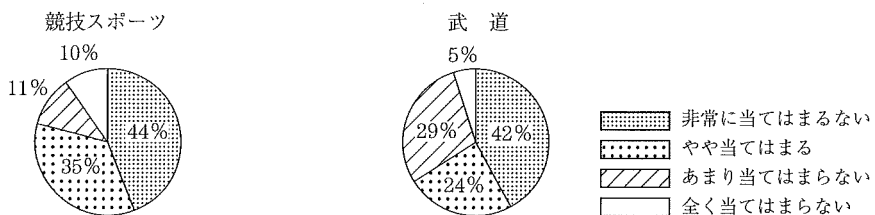
3. 柔道は身体を敏活にする (図7)



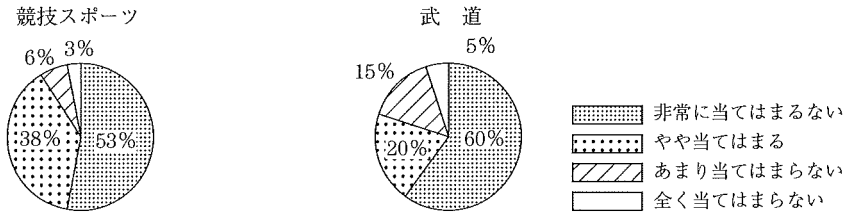
4. 柔道は克己や忍耐、礼儀正しさ等の精神修養に役立つ (図8)



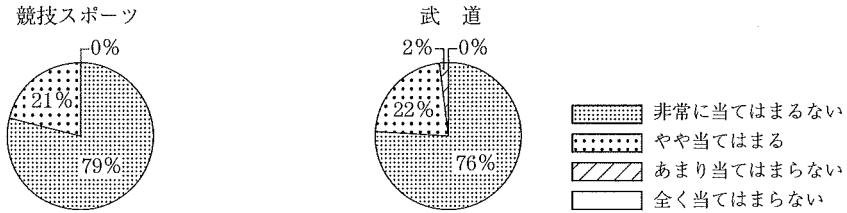
5. 柔道は観察や記憶力、工夫等の智力を養うことに役立つ (図9)



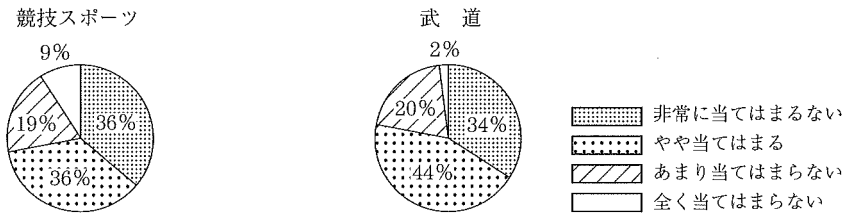
6. 柔道の稽古は打ち込みから乱取りへといった順序がある (図10)



7. 受け身は身を守る方法である (図11)



8. 試合は結果よりもプロセスが大切である (図12)



9. 技を掛ける時、崩しや体さばきを意識している (図13)

